

◆宮台さん講演をこう受けとめました。参加者より（宮台さん未確認）文責：稲垣道子

・人間を中心に、人間のニーズに応える安全・安心・便利・快適で街を評価するような功利主義的な発想では街や環境を保全できない。ニーズに応じてきて、満足度は高いが幸福度は低い国になった。

・ベアード・キャリコット（環境倫理学者）は、人ではなく「場所」を主体にしろという。人間は、場所に寄生（パラサイト）するもの。街の全体性—全体性として創造可能な「街」という生き物—にとって自然なことかどうかで判断することがとても大切。「場所」は単なる空間ではなく、人の営みやコミュニケーションや人の感覚地理、内側から生きられる何物かを持っているが、そうした人と物と情報とあまたのアマルガムから成り立つ「場所」の時間的展開を明らかにすることによって、何がその「場所」にとって自然なことなのかわかる。

・人間のニーズを中心にしたまちづくりは、必ず人間の尊厳を脅かすものになる。人と場所の関係、ひいては人と人との関係が入れ替え可能なものになってしまうから、というのがキャリコットの結論だ。

・なぜ人々のニーズに応じたら街はでたらめになるのかは、深い問題。いくつかヒントはあり得る。まず、ある街がよい街になるために必要な積み重ねの尺度は、人生の尺度の何倍も何十倍も必要。街のよさを支える何らかの視座、視界のスパンとよき人生を送るための視界のスパンは、おそらく違う。

・もうひとつ決定的なことは、人間は規定されているものの中にいる限りは、世界を生きていると感じないという根本的な問題がある。無規定なもの、カオティックなもの、決定不可能なものに囲まれていて初めて、世界の中に生きていると感じる存在であると、おそらく自らを感じるのだろうと思う。

・こうした発想は、ある程度、社会に宗教が根づいているような国では自明だ。しかし、日本は、昔は、得体の知れないものに囲まれていることを是とする発想があったが、今は全くない。宗教がある国であれば、人間は愚かであるとの自覚が制度化されていて、「神の視座」に対する理解がある。

・人々のニーズに応じたら街はでたらめになるのかという問題は、実は、十分に解かれていない。キャリコットもそれを解く代わりに、街をひとつのトータルな生き物としてとらえることによって、我々の尊厳が保たれるという経験知をフィールドワークの結果をベースにして語っている。自分自身では言語化できない理由によって、尊厳が、自己価値が、自分がここにいることの価値が奪われてしまうということ。街を、あるいは「場所」を、どう生き物として捉えるかというのは、それぞれの社会の歴史や成り立ちに依存するものであって、日本人ならではの街という生きものの捉え方や感じ方があるのだろう。

・民主主義には主題化できるものとできないものがある。グローバル化対応や内政上の問題は、最も難しい。社会は、難しいものとしてある。「未規定性を抱えたものとしてある」ということが重要な認識で、それをわかって街を設計するかわからないで設計するかでは雲泥の差。わかる人の設計は、未規定性を残す。たとえば、浅草ならカオスが残っていることが意味論的な統一性を感じさせるように残す。

・社会学の世界では、「計算不可能性を設計する」（講師の著書名）ことの大切さが最近理解されるようになってきた。計算不可能性を設計する必要があるのはなぜかということ、我々の尊厳が保たれるため。何もかも計算可能化しようとする営みは、我々を不安に陥れる、ということになる。

・安全・安心・便利・快適を無視するのではない。しかし、何よりも必要な価値なのかということは考えてみるべきではないか。ニーズの追求がもたらす後遺症や副作用をどこまで小さくできるかという是々非々の懸命な努力の積み重ねがあるだけだ。羽根木プレーパークでは、安全でなくてもこどもは輝く。輝きとかときめきという尺度は、行政用語になりにくい。

・ニーズに応じた決定ではない決定をもたらすために、ワークショップ（WS）が有効。専門家は、考えるための条件*をたくさん提出する。判断するのは、住民だ。熟議とは、単なる話し合いではなく気づきが目的。みんなが元々持っている利害やイデオロギーは、それとして、話しているうちに気づくのが大事な事。参加人数は20人が限度といわれるが、テクノロジーを活用すれば、いろいろなことが可能だ。

・よい街は、強力な権力による誘導、つまり私権制限により初めて可能。用途制限より私権制限というキーワードが重要。日本には私権制限はほとんどない。

・絆にはコストがかかる。コストをかけないで、絆が大切と綺麗ごとを言っても無理だ。

* 専門家は、if, then 文（もし、〇〇ならば、□□である）の集積を伝えるのが役目。条件プログラムは、if, then で表わされる。目的プログラムは、こうすべきだ、というそれ自体条件づけられていない目的のこと。最終的にそれ以上遡れない目的、価値にコミットする部分。条件の手段の有効性とは、目的に貢献するかということ。そのための条件は？というように、ブレークダウンされていく。

・目的プログラムとしてなら規定できても、条件プログラムとして、どうすればより輝くのか、わくわくするかを規定するのは難しい。キャリコットが言っているのもそのこと。街を便利にし、よりノイズを減らすと、よそよそしくなる。体験としてはわかるが、では、どうすれば、近くなるのかを積極的にいうのは、ものすごく難しい。

（第2回基本構想審議会でのご発言中の目的プログラム、条件プログラムについての質問に対して）

以上